

# くすり箱

発行  
桐生厚生総合病院 薬剤部  
発行責任者 田村 潤一(薬剤師)  
編集担当者 細谷 潤(薬剤師)  
児玉 博(薬剤師)  
監修 皮膚科 岡田 克之(医師)



第20回目のテーマは、  
“当院採用のステロイド”の塗り薬と塗る量“についての紹介です。



## ステロイドの塗り薬とは？

塗り薬に含まれるステロイドは、副腎皮質ステロイドホルモンのことで、さまざまな働きで炎症を抑えます。この「抗炎症作用」が、アトピー性皮膚炎やかぶれなど各種の湿疹・皮膚炎・激しい虫さされ・乾癬などで効果を発揮するのです。やけどの初期に使うこともあります。

“こわいくすり”というイメージを持つかもしれませんが。薬ですから副作用の出ることもありますが、正しく用いれば発疹をととても良くしてくれます。こわいのは、ステロイドの副作用を恐れ、ステロイドが必要なのにそれを避けてしまうことです。

皮膚科医は、炎症の程度・部位・年齢などによってきめ細かに塗り薬を選んでいきます。不適切な使用は副作用につながります。医師や薬剤師に説明された方法で正しく使っていただき、分からないことは、どんどん聞いてください。



当院で採用しているステロイドの塗り薬(強さによるランク別)



ランク	商品名	当院で採用している剤形			規制区分
		軟膏	クリーム	ローション	
<b>最も強い</b>					
0.05%	デルモベート	●		スカルブ	劇薬
<b>とても強い</b>					
0.10%	フルメタ	●			劇薬
0.05%	アンテベート	●	●	●	劇薬
0.05%	トブシム		Eクリーム	●	劇薬
0.05%	マイザー	●			
<b>強い</b>					
0.30%	エクラー	●		●	
0.10%	メサデルム		●		劇薬
0.12%	リンデロン VG	●	●	●	
0.03%	プロパデルム	●	●		
<b>中くらい</b>					
0.30%	リドメックスコーワ	●		●	
0.10%	アルメタ	●			
0.05%	キンダベート	●			
<b>弱い</b>	当院での採用品なし(皮膚科では、ほとんど使いません。)				

※ 軟膏・クリーム・ローションは、目的や部位などにより使い分けられます。

※ リンデロン VG は抗生物質を含むので、一般的な湿疹・皮膚炎には使用しません。

※ 劇薬：厚生労働大臣が法令で指定した薬物。適切に塗れば危険はありません。

## 塗る量は？

塗り薬にも適量があります。少ないとせっかくの効果が出ず、多いと無駄になるばかりか、副作用も出やすくなります。飲み薬に1錠とか1包といった単位があるように、塗り薬にも目安となる単位が作られました。FTU(finger-tip unit:フィンガー・チップ・ユニット)です。

成人男性が人差し指の指先から第1関節まで、口径5mm(25gチューブ)で軟膏やクリームを絞り出すと[1FTU=約0.5g]となり、この量で「指の腹まで含めた手のひら」2枚分(全体表面積の約2%)に塗るのです。この量はチューブの口径によりますし、この半分くらいでちょうど良いという意見もあって、あくまで目安。軟膏なら少しテカテカ光るくらい、クリームなら少し白く残るくらいがちょうど良いようです。

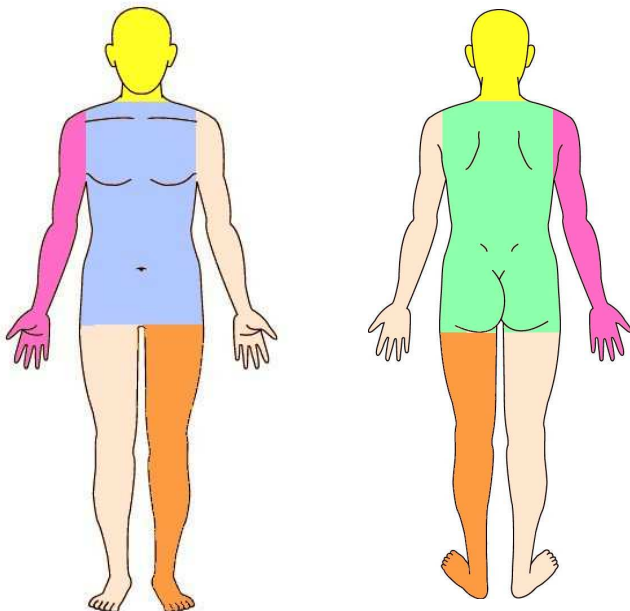


各部位に塗る量を、上記に示したFTUに換算するとおおよそ下記の量になります。

※表はあくまでも目安です。**医師の指示通りにお使い下さい。**

年齢	顔と首	片腕	片手	片脚	片足	体幹・前 (胸部と腹部)	体幹・後 (背部と殿部)
3~6ヵ月	1 FTU	1 FTU		1.5 FTU		1 FTU	1.5 FTU
1~2歳	1.5 FTU	1.5 FTU		2 FTU		2 FTU	3 FTU
3~5歳	1.5 FTU	2 FTU		3 FTU		3 FTU	3.5 FTU
6~10歳	2 FTU	2.5 FTU		4.5 FTU		3.5 FTU	5 FTU
成人	2.5 FTU	3 FTU	1 FTU	6 FTU	2 FTU	7 FTU	7 FTU

※ お子さんに塗るとき、子供の指ではなく親御さんの指で測います。  
[http://www.maruho.co.jp/medical/academic/square/pdf/vol03\\_05.pdf](http://www.maruho.co.jp/medical/academic/square/pdf/vol03_05.pdf) から引用改訂



次回は、2011年9月発行予定です。